「教育」とは

『大熊町　学校再生への挑戦』著：武内敏英 編：福島県大熊町教育委員会

（2012 年 かもがわ出版）

木村有紀

学校とはどのような場所だろう。教育とは何であろう。『大熊町　学校再生への挑戦』を読んで、最初に感じたことである。本書は、原発事故により全町避難を余儀なくされた大熊町の教育委員会教育長・武内敏英が、避難先の会津若松市で学校を立ち上げるまでを綴ったものである。避難後、わずか 5 日で学校立ち上げを決断した武内氏はどのような想いであったのだろうか。彼は、「学校」という場所が大熊町の子供たちの心のよりどころになると考えたのではないだろうか。生まれ育った故郷を追われ、友人と離れ離れになり、慣れない土地で不安だらけの中、生活をする子供たち。彼らの「精神面での復興」という意味で学校は大きな役割を果たしているように思う。

学校立ち上げにあたり、会津若松をはじめとした多くの人々の協力には、人と人との繋がりの大切さを考えさせられる。また、教職員全員が被災者であり、避難生活を余儀なくされている中でも、「できるだけ早く入園・入学式を」と学校立ち上げに励む姿には、子供たちの笑顔を取り戻そうという想いが感じられる。子供たちにとって学校で学べること、友だちに会えることは喜びであり、震災で傷ついた心のケアにも繋がるのだと述べられている。

第 4 章では、大熊町の学校教育について書かれている。大熊町では以前から、「読書習慣を身につけ、自ら本に手を伸ばす子ども」を育てることを目標としている。子どもたちに主体性を持たせるのである。日本の復興を担うのは子どもたちの世代であり、子どもの意見・考えを聞く環境を広く作っていけば、彼らは主体的に学び考えを染めていくことができると述べられている。

震災から 5 年がたった今もなお、大熊町は町民の約 96%が居住していた地域が帰還困難区域に指定されており、現時点において本格除染の計画がない状況である。本書で紹介されているように「夢は、大熊町に帰り、サッカーをすること」「もう家に帰れないのかなと思うこともあるけれど、やっぱり帰りたい」といった声がある。他方で、震災から 4 年半を経て、大熊町への帰還についてのアンケートで 6 割以上の人が「戻らない」と考えている（大熊町ホームページより引用、平成 27 年 8 月時点）。改めて、復興の難しさを感じざるをえない。

本書の最後に「教育は、子どもたちと人々の心に希望の灯をともし、理想を追求し続けるいとなみです」とある。現在の教育は人々の心に希望の灯をともしているだろうか。教育とは何なのであるか、今一度考えさせられる本である。